

西南学院と戦争

— アメリカ南部バプテスト・ミッション側からの視点を巡って —

古澤 嘉生

戦争が西南学院に与えた影響について、筆者の戦争体験を踏まえての執筆を依頼された。すでに『西南学院史紀要』には、第3号に内海敬三氏による「西南学院とアジア・太平洋戦争」と題しての論考があり、さらに第4号には松見俊氏によって「戦時下のチャペルと西南学院の戦争との関わり」という題目の論説が掲載されている。内海氏は戦時下に西南学院中学部に学んでいたので、学院内での戦争体験者であり、論考の内容には大変に興味深い事項が述べられている。農村に宿泊しての勤労奉仕・作業、福岡の蓆田（板付）飛行場建設への勤労働員、軍需工場への学徒動員、福岡大空襲（1945（昭和20）年6月19日）など体験に基づいた諸事項が記されており、同時代に生きた筆者も同じ体験をしたのでいろいろと回顧しながら興味深く読んだ。

一方、松見氏は主に1934（昭和9）年から発行されていた『西南新聞』の記事を探し、それに基づいた戦時下の広範囲に亘る諸事項が丹念に記述されている。戦時中の『西南新聞』には今まで目を通す機会はなかったこともあって、当時の学院長、校長の講話など初期における部分と戦争の進行に伴い事態が緊迫して行く状況に応じて変化して行く様を興味深く読んだ。戦争遂行に向かって軍事政権の下、国家全体、全国民が動員され、すべてが戦争遂行に邁進を余儀なくさせられた中で、外部からの援助は途絶え、あまつさえ敵国アメリカ、その敵国の宗教、キリスト教宣教団によって創設された西南学院を存続させ、維持経営していかなければならない学院長をはじめ学校の指導者たちの苦悩・懊悩は想像するに難くない。戦時中から戦後にかけて学院長を務めたキリスト者、水町義夫は英文学者であり、特に詩歌を愛する自由人であった。戦後、大学が設立されて水町院長は引退しておられたが、英文学、なかでもシェイクスピアや英詩を講じておられた。筆者にとっては恩師の一人であり、またゼミの指導教授でもあった。

筆者と西南学院との関わりは、1949（昭和24）年、新しく設置された新制大学として発足した西南学院大学に最初の新入生として入学してから始まる。したがって戦時下の西南学院とは関わりはなかったし、直接は何も知らない。ただ当時いわゆる「大東亜戦争」が勃発した1941（昭和16）年は小学校の6年生であったと思う。真珠湾攻

撃を祝して、学校から鳥飼八幡宮に提灯行列をしたような記憶がある。翌1942（昭和17）年に西南学院に隣接している公立の中学校（旧制）に入学した。しかし、西南学院における戦時体制下の諸事情・状態に共通する様々な厳しい多くの体験を持ったと思う。与えられた標題に関して稿をまとめるに当たり、先の両氏の史実に基づいた論考は貴重な資料であり、そこに用いられた資料以外の新たな資料を見出すことは困難であるように思われる。

西南学院は、周知の如くチャールズ・ケルシィ・ドージャー（以後、C.K.ドージャー）によって1916（大正5）年に創設された。創立者C.K.ドージャーは、アメリカ南部バプテスト派から派遣された宣教師であった。そこで南部バプテスト・ミッションから見た戦時下の日本における教育を含めた宣教の状況を記録し、かつ考察してきた視点があるのではないかと考えた。幸いに南部バプテスト宣教団から派遣されていた宣教師、後に西南学院大学神学部教授としても教鞭をとっていたキャルヴィン・パーカー（Calvin Parker）が、南部バプテスト派の日本伝道開始1889年から100年間の日本伝道の歴史を史実に基づいて研究し、一冊にまとめてアメリカの出版社（University Press of America）から出版した著書がある。書名は *The Southern Baptist Mission in Japan, 1889-1989* である。この中から戦時体制下の戦争と西南学院に関する情報がある程度は得られるのではないかと考えた。以下、主に史実に基づき、ミッションから見たパーカーの論述を参考にし、筆者のコメントも挟みながら稿を進めることにしたい。

（本稿は、学術的な論述ではないので、注は原則として付けないことにする。パーカー氏はアメリカ・ヴァージニア州リッチモンドの南部バプテスト外国伝道局に保管されている膨大な日本宣教に関する資料をはじめとして、種々の他の文書資料、さらに戦後も再来日して奉仕した宣教師からの口頭でのインタビューに基づいて本書をまとめており、出所、出典等は原著に明確に記されている。ここでの再録は行わないことにする。著者パーカー氏とその詳細な、優れた研究業績に深甚の感謝を表明するものである。）

1. アメリカのバプテスト派の日本宣教

日本におけるバプテスト派の宣教活動はアメリカの二つの大きな教派・教団によってなされてきている。北部バプテスト派と南部バプテスト派によるものである。前者はいくぶん自由で進歩的であり、それに対して後者は比較的に保守的であると一般に考えられてきた。前者の「北部バプテスト」は日本では「バプテスト東部組合」と称した。代表的な教育機関は横浜の関東学院である。「南部バプテスト」は日本では「バ

「バプテスト西部組合」を組織し、その代表的な教育機関が福岡の西南学院である。

比較的に進歩的な傾向をもつ北部バプテストと保守的な南部バプテストの両者が合同するようなことは普通には考えられないのであるが、戦時体制下の日本では両者の統一が見られたのである。しかし、これは恐らく内部の気運から生じてきたことではなく、外的な圧力、即ち当時の日本の国策の影響によるものようであった。両者は1940（昭和15）年1月に姫路市で第一回の総会を開催し、「日本バプテスト教団」を結成したのである。日本の宣教団からアメリカのボード（伝道局）へは「日本での1万人の活動的なバプテスト信徒を代表した200人の代議員が出席した」との報告がなされているが、これはいささか誇張であったろうとパーカーは言っている。当時の各教派の信徒数は、長老・改革派=55,372人、メソジスト=50,505人、組合派=33,523人、聖公会=28,587人で、バプテストの活動的信徒数は2,556人となっていたので、諸他派と比較しても、バプテストの群は遥かに少数グループであった、と言わなければならない。先の姫路大会に出席していた多くの代議員たち、特に東部組合に所属していた代議員は日本のバプテストの合同を喜んだ、という。当時は宣教師の定期帰国でアメリカにいた南部バプテスト派（西部組合）のウィリアム・マックスフィールド・ギャロット（William Maxfield Garrott：戦後、再来日し西南学院大学設置の重要な貢献者で、大学の初代学長となった）は、南部バプテスト外国伝道局に「今回の統合は新勢力となり、進取的であり、日本における今後の宣教には新しい力と効果を及ぼすものとなるであろう」と報告していた。またこの大会では、統一されたバプテスト教団の今後10年間の宣教目標として三つの提議が提示された。それは「①福音宣教を活発化することにより、諸教会会員の倍増を目指す。②教会数を倍増する。③十一献金を奨励して教会の自立を増進する。」であった（注：十一献金は十一という数字の10%を当てはめて、収入の内、クリスチャンが捧げるべき献金として推奨したもの）。パーカーはこの提案を回想して次のように述べている。「これらの目標は、やがて来る5年に及ぶ暗闇の中で、口笛を吹くようなものであった。しかし、これらの良き目標と熱心な志向を鼓舞した根深い信仰は、戦争がもたらした大惨劇、大破壊の後に起こった霊的な風土の急進的な変化により、これらの目標の実現化を見るようになったのであろう」と。統合された日本バプテスト教団の総裁には当時バプテストの中で傑出した人物と目されていた千葉勇五郎が選出された。また東京にバプテストの合同神学校を設立するための委員会も組織された。南部バプテスト側からエドウィン・バーク・ドージャー（Edwin Burke Dozier：以後、E. B. ドージャー、西南学院創設者 C. K. ドージャーの長男、後、大学神学部教授、第9代西南学院院長）、北部バプテストの宣教師が1名、それに8人の日本人がこの委員会に加わった。

2. 日本バプテスト教団内の協力（旧東部組合と旧西部組合の共同作業）

1940（昭和15）年5月には、宣教団の理事会は旧西部組合に対して、その所有の資産を理事会の管轄下に置くように指示した。そこでは全教会、牧師館を合同教団の管轄下に置くこと、ただ宣教師館、東京の寮とその他若干の所有物は除外された。西南学院に関わる事項もあった。当時の南部バプテスト外国伝道局の東洋主事であったセロン・ランキン（Theron Rankin）は、後には外国伝道局の総主事を務め、戦後は伝道局総主事としてわが西南学院の復興、殊に大学設立後の建築物である第1号館（旧、チャペル等の建築のための多大の資金の準備に貢献した人である。1954（昭和29）年に建築された大学チャペルは彼の偉大な貢献に感謝を表明して、彼の名を冠し〔ランキン・チャペル〕（Rankin Chapel）と命名された。彼の助言により1941（昭和16）年には、熊本、長崎、下関にあった宣教師館を売却してそれを諸教会建築の資金に当てたこと、また東京、広島にあった宣教師館と E. B. ドージャーが個人で所有していた軽井沢の家を売却して献金した資金を合わせたもの、金額にして172,000円が西南学院に寄付されたのである。それを受けた西南学院は賢明に福岡の校地拡張のために使い、また学院の基本財産に加えたのである。

東西合同の日本バプテスト神学校が多摩川を臨む東京、田園調布の魅力的な神学寮において開校された。これは東部組合によって先に建築されていたものである。東部組合のバプテストの神学校は横浜にあったが、1937（昭和12）年に青山学院神学科（メソジスト派）に合流合併し、田園調布に神学寮を建築していたのである。新しい日本バプテスト神学校校長には、合同教団の総裁である千葉勇五郎を迎え、千葉は説教と牧会学の教授も務めた。福岡のバプテスト神学校からは、先に西南学院神学科長で旧約聖書学の教授であった栗谷廣次が加わった。その他に日本人2人、宣教師2人の専任教授が備えられた。宣教師教授の一人は、後に戦後、西南学院長、大学初代学長となるギャロットで、新約聖書・ギリシア語を担当した。ギャロットは休暇で新約聖書学と宣教学を一年間ニューヨークのユニオン神学校で研究を終えた後であった。学生数9名、内2名が旧西部組合からの学生であり、男子神学生のための神学校であった。そして福岡には1935（昭和10）年から女子の献身者のための高等学部神学科女子部（後の西南女子神学校、英語で Training School と称していた）が存在していた。モード・パーク・ドージャー（Maude Burke Dozier：以後、モード・ドージャー、西南学院創立者 C. K. ドージャー夫人）は、この学校を北九州の西南女学院に移し、幼稚園教員養成教育の学科を設ける希望をもっていたが、これは実現しなかった。しかし、1940（昭和15）年4月には、福岡に移すことで文部省から認可があり、幼稚園

教師養成学校である西南保姆学院が設置されることになった。これが将来、西南学院の児童教育科に発展して行くことになるのである。

3. 西南保姆学院

神戸に在住していた福永津義が西南保姆学院の保育科主任（後に福岡保育専攻学校と改称され初代校長）として迎えられた。また舞鶴幼稚園が保姆学院の教育実習の場として、これに併合されることになった。保姆学院には7名の新生が入学した。モード・ドージャーは、この学校は幼稚園教員教育科であるが、聖書科に匹敵する、あるいは相当するものであると考えていたが、この時期に聖書科などは承認されるわけではなく、1942（昭和17）年に、最初の卒業生を送り出した。そしてこの学校には、より適切な施設が必要であると考えられ、福岡の鳥飼の地に1,014坪が、12,048ドルで購入され、余裕のある二階建ての校舎が建築された。1941（昭和16）年6月、その献堂式が不気味な、猛烈な嵐の日に行われた。この西南保姆学院の土地、校舎の提供は、太平洋戦争が終結するまでの、アメリカ南部バプテスト婦人連合が行った、目に見える形での最後の援助・貢献であったのである。

1940（昭和15）年、従来からあった両学院、福岡の西南学院、小倉の西南女学院は順調に運営されていた。新学期が始まって、西南学院高等学部には1,409人の生徒が在籍した、と記録されている。チャペル、バイブルクラス、その他の宗教活動も普通に行われていた。5月には当時著名なキリスト教伝道説教者、木村清松による伝道集會が開催され、モード・ドージャーの報告によれば、460人の生徒と数人の教師が信仰への招きに応じたということであるが、バプテスマ（洗礼）を受けるに至った者はそう多くはなかった。彼女はこの伝道集會を見て大いに喜びに満たされた。しかし、心中には、学院の精神と生命はやがて日本の向戦勢力に押し潰されるのではないか、との不安があった。西南学院の創立者夫人として創立者の精神を代弁する生きた声として、彼女は、1933（昭和8）年の学院理事会が決定した日曜日のスポーツ競技禁止の完全な履行を強力に主張していた。1939（昭和14）年9月には、学院の水町院長はじめ9名の指導者たちを集めて会合を持ち、「日曜日の件」を厳守するよう要請した。緊張した5時間に及んだ会合で、彼女は西南学院として安息日をも守ることを止めるならば、学院はもはや「キリストに忠実」であることを止めることになる、と言っていた。

西南学院は先に第3代西南学院長（1929-32）を一時期務めた宣教師、ジョージ・ワシントン・ボールデン（George Washington Bouldin）が唱道していたように、あ

る程度の妥協したポリシーによって、この頃までは日曜日の試合は制限されていたが、それほど厳格な禁止はしていなかった。

4. 時局の緊張と宣教師側が受けた制限の増大

1940（昭和15）年の初め数ヵ月は、宣教師は当局の干渉を受けることなく、種々の行動が自由にできていた。西南学院に関係があった宣教師に限ると、アルマ・グレイヴス（Alma Graves）は、セシル・ランキャスター（Cecil Lancaster）と共に西南女学院で英語と聖書を教えていた。ドージャー家のエドウィンとその夫人、メアリー・エレン（Mary Ellen）、ならびに創立者夫人モードの3人は福岡に居て西南学院と教会で働きを続けていた。エリザベス・ワットキンズ（Elizabeth Watkins）も西南学院で奉仕を続けていた。さらに伝道局からは新しい宣教師たちが日本に送られ、東京の日本語学校で学んでいた。しかし、彼らはまさにこの国の極めて困難な危機の時期に日本にやってきたのであった。1937（昭和12）年以降、戦時体制が国内に拡がり、検閲、夜間の停電、また牛乳、米、パン、燃料等を買う配給制度の長い列に並ぶことが始まっていた。このように色々と厄介な、面倒な事柄も当時の宣教師たちには普通のことになっていたのである。

ところが、1940（昭和15）年の晩夏から初秋にかけては恐怖を覚える諸事が起こり始めた。親米の総理大臣の辞任後、僅か6ヵ月で新しい内閣の陸軍大臣に東條英機大将が就任することになったのである。8月には救世軍の7人の指導者たちがロンドンにある救世軍の本部に定期的な報告書を送ったのが〈スパイ〉行為であるとの罪状で逮捕されたのである。キリスト者の間では、その前年に“エホバの証人”に対する抑圧がなされた時よりも心配で、不安を覚える出来事であった。そこでは、52人の“エホバの証人”が国家に対する反逆罪ということで告訴されたのであった。9月には日本はナチス・ドイツと、またファシスト・イタリアとの日独伊三国同盟に調印している。

新たな敵意に満ちた、時に興奮した空気、風潮の中で、街でまたバスの中などで、しばしば〈スパイ〉という言葉を聞くようになった。警官が彼らを、いわば〈守護天使〉のように尾行し、たえず監視するようになってきた。これに加えて思想警官による尋問が行われるようになったのである。E.B.ドージャー夫人であるメアリー・エレン、またギャロット夫人のドロシー（Dorothy Garrott：彼女は戦後、再来日後は福岡、西南学院の構内に院長・学長夫人として住み、大学において英語で新約聖書『マタイ福音書』を講じていた）は赤ん坊をあやす必要があるような時にも執拗な尋

問を受けることをこぼしていた。外出時など1時間、あるいはそれ以上の時間、日本の種々の政策について、当時の支那（今の中国）事変のこと、上海爆撃のこと、また天皇陛下の役割などの質問攻めにあうことがしばしばあった。家にいる時も、たとえ宣教師は恐れを感じなくても、日本人のお手伝いや友人が来ている時など恐ろしい警官がいろいろと質問を始めると、彼らは恐怖におびえ震えあがることがよくあり、やがて宣教師たちは、日本人が外国人と接触を持つと怖い結果が起こることを憂い、心配で困惑することが分かってきた。

1940（昭和15）年8月、9月の恐怖の時期にあった時、学校では宣教師の教員は日本人教師と入れ替えられてしまうことが起こってきた。E. B. ドージャーは、西南学院高等学部（大学の前身）英文科長そして聖書担当教授であったが、その職を失った。小倉の西南女学院では地方の右翼が、丘の上にある学校の存在を戦略上不適切であるとの理由で学校の閉鎖を目論み、3人の宣教師理事、2人の教師の辞任を迫った。西南女学院で教えていたグレーヴスは身の安全のために直ちに福岡の西南学院に移ることになった。グレーヴスは先に皇居（宮城）に向かったの拝礼、すなわち公的な〈宮城遥拝〉に加わることを拒否していたのである。

このように、職を制限され、日本人の仲間とも分離され、一方、アメリカ大使館、領事館からは、日本からの避難、特に婦人、子ども、老人は直ちに日本を離れるようにとの勧告がなされ始めた。宣教師たちは召命を受けてはるばるやって来た土地、日本を去るべきかどうか、難しい決断を迫られることになった。伝道局東洋主事ランキンは、この決定は伝道局によるものではなく、各個人によってなされるべきものだということを強調していた。引き揚げが始まり、最初は北九州の戸畑で伝道、奉仕をしていたナオミ・シェル（Naomi Schell）と福岡、西南学院のグレーヴスであった。シェルは身体障害があり、戸畑教会は彼女が居残れるようにミッションに住居を準備するように願い出たが、今は帰国し、アメリカの整った病院で適切な治療を受けるべきだということになった。グレーヴスは定期帰国の時期を早めて、シェルに付き添って帰国することになり、9月14日に神戸を出港した。11月には西南学院創立者C. K. ドージャーの夫人であるモードとエリザベス・ワットキンズが、それぞれの母親を伴って神戸港を出港した。港で日本の官憲の敵意ある粗暴な行動にショックを受けたモードは、長男エドウィンの夫人、メアリー・エレンに、まだ可能なら子どもたちを連れて日本を離れるように忠告し、彼女は二人の子どもを連れ、夫エドウィンを残して11月25日に後ろ髪を引かれる思いで日本を離れたのである。後に彼女は「あの時の決定は、今まで経験した内で最も難しい決断だった」と述懐していた。

1940（昭和15）年夏に起こった政局の変化は、統一された日本バプテスト教団、な

らびに他のキリスト教団体に深刻な影響を及ぼすことになる。プロテスタントの指導層は政府の官僚主義者連の要求、また今から来るであろう要求について幾度も集まって討議を重ねていた。文部省はキリスト教の諸団体に対して、



エドウィンとモードのドージャー親子

1941（昭和16）年4月以降、外国からの資金を受けることを禁じ、宗教法人法による諸教派に対して種々の制限を課してきた。また政府関係者とプロテスタントの中

でもエキュメニズム（注：教会一致促進運動のこと）の考えのグループとの強い圧力の下、統一されたキリスト教会、即ち「日本基督教団」が形成されることになったのである。

日本バプテスト教団は1940（昭和15）年1月に、第一回の総会（設立総会）を持ち、あまり日も経っていないのであるが、同年10月には第二回の、そしてこれが最後になった総会を開くことになった。173人の代議員が出席し、西南地方の連合からは29人で、その中にはE. B. ドージャー、ギャロット、ランキヤスターもいた。決議された事項は、伝道局からの財政援助を受けるのは、1941（昭和16）年3月末日までであるとし、それ以降は、財政的にすべて自給自立となるということであった。この会合の主要目的は、やがて来るであろう「日本基督教団」への「日本バプテスト教団」の加入承認の件であった。散会后、代議員連は青山学院で開催されていた2万人の基督教徒の大集会に参加したのである。そこでは35ほどの教派の全プロテスタント団体（一教派を除く）が一つの教会となり、国家の戦争努力を全面的に支持し、協力をする誓約がなされたのである。このような動きは、南部バプテストにとっては一つのアナシマ（anathema）であった、とパーカーは書いている。この用語は〈破門〉の意味があり、とにかく、言語道断な措置である、と言う訳である。

宣教師の日本からの引揚げについては先にいくらか述べたが、まだ日本にいる間の彼らが体験した苦しい生活の一部を紹介しておきたい。ギャロット夫人のドロシーは食事の準備をするのに、臭いの強い木炭の火鉢を使わなければならなかった。また暖をとるのに横浜のボールデン家から灯油のヒーターを借りたが、その芯が燃え尽き、〈替芯〉は手に入らなかった。

寒く厳しい条件の下で赤ん坊の育児に悩んだギャロット夫人は、ある時、夫に向かって「ほんとに不自由で、苦しくて心地よくない！」と不平を言った。その答えは「きみは不自由のない安楽な生活のために日本に来たのか？」であった。実にギャロットならではの言葉であろう。1941（昭和16）年3月6日に、アメリカ領事館から第三回の引揚げ警告が出され、ドロシーは長女エリザベスと共にアメリカに向けて出帆した。夫のギャロットは、「たとえ両国間に戦争が始まっても、アメリカと日本のバプテストを結ぶ環となるため留まって奉仕をしたい。自分が1934（昭和9）年に初めて日本に来た時よりも今は、なおのこと、主は私をここに必要としておられる」と言っていた。E. B. ドジャーは、国の政策によって学校で聖書を教えることを禁じられたことを嘆いていた。またドージャー家に水町学院長が訪ねてくる時など、いつも警官もドージャー家に来て、彼の訪問について訊問していた。モード・ドージャーが離日前の4月11日という日に急遽とり急いで、夫C. K. ドジャーの小倉、西南女学院内にある墓地に墓参に駆けつけたのであったが、無論警官に付き添われていた。戦後、かなり時間が経って戦時中、西南学院長であった水町義夫は、当時の回顧談の中で、墓石に泣いて抱きつくドージャー夫人を警官は冷たく見下ろしていた、と語っていた。

宣教師、それも南部バプテスト派宣教師で、最後まで日本に残ったのは、唯一人、ギャロットであった。1941（昭和16）年12月8日、東京で電車の中の隣の人が読んでいた新聞の大きな見出しが見えて、遂に戦争が始まったことを知った。翌12月9日には、ギャロットも「きみの保護のために」ということで抑留された。東京、田園調布のカトリックの学校で、一室に12人のアメリカ人男性が一緒に収容された。彼はスイス赤十字の好意で「安全！元気！無事に抑留された！」とアメリカに先に帰国していた夫人ドロシーに伝言を送った。戦争が始まったの2、3ヵ月には、宣教師たちの中には警察の訊問に悩まされた者もいたが、ギャロットは不当な取扱い、待遇は受けなかった。むしろ、関係の役人たちが彼の自宅からピアノを運んできてくれたのである。彼はフルートの名手で、ピアノもよく弾いていた。ある時には一人の担当の役人が紙に包んだ物をこっそり手渡ししながら、「あなたはこれが欲しかっただろう」と言って夫人ドロシーの写真を持ってきてくれた。彼は自分の著書の中の自伝の章にこの事を書き、感謝したことを述べている。

前年、日本から帰国した宣教師の中には他の国に再派遣された者もいた。西南学院にいたグレーヴスはナイジェリアのイオ（Iwo）のバプテスト大学の英文科の主任になっていた。最後まで日本に留まったギャロットも捕虜交換船で帰国せざるを得なくなった。1942（昭和17）年6月、交換船「浅間丸」で日本を離れることになる。シンガポールに寄港し、全部で1500人のアメリカ人、内、600人の宣教師とその家族、南

部バプテスト派の宣教師、40名、日本からはギャロットただ一人、39人は当時の支那（中国）からで、その中にパール・タード（Pearl Todd）がいた。タードは戦後、日本、西南学院に派遣され、小柄な彼女であったが、熱情をこめて英語、またバイブル・クラスを教えていた。

結び [戦前、戦中、戦後を通して西南学院に貢献した宣教師]

「西南学院と戦争」の標題について、パーカーの『南部バプテストの日本宣教 1889-1998』を基にして、アメリカのミッション側からの視点から見ることにし、「南部バプテスト・ミッション」が日本に宣教をしてきた過程の中で、太平洋戦争が始まる前後からの宣教師が体験した記録、宣教師の大変な苦悩と労苦を見てきた。戦前にも、また戦後にも再来日し西南学院で直接に奉仕をした宣教師の教員は5人（2夫妻+1人）であったと思う。最初に戦後再来日したのは、1946（昭和21）年、西南学院の創立者C.K. ドージャーの子息、E.B. ドージャーであった。彼は東京で伝道牧会を続けながら、アメリカ南部バプテストと日本のバプテスト（旧西部バプテスト）との橋渡しの役を務め、種々の働きに大きな貢献をなした人であった。1958（昭和33）年からは西南学院大学神学部実践神学教授に就任、後には第9代西南学院長（1965-69）を務めた。グレーヴスは1947（昭和22）年に再来日し、西南学院専門学校、続いて大学において優れた英語・英文学教授として西南の英語教育に多大の貢献をした宣教師の教員であった。ギャロットとその夫人ドロシーも同年に再来日、ギャロットは戦時中に最後に交換船で日本から引き揚げたが、再来日し、戦後の最初の西



夫妻でピアノとフルートの演奏を披露するギャロット先生

南学院長（第5代1948-52、第11代1973-74）、また新制度による大学の創設に中心的な、重要な役割を果たし、その初代の学長に就任した。英気に満ちみちたこの教師から、直接指導を受けた筆者は、ギャロットの〈人となり〉の一部を紹介して、本稿を閉じたいと思う。

ギャロットは1962（昭和37）年頃には小倉の西南女学院に移り、そこで西南女学院長を務めていた。1972（昭和47）年、再び西南学院大学神学部からの専任教授として招聘を受け、学院に戻り、再び西南学院長にも選任された。1974（昭和49）年5月11日の西南学院創立記念日の式典では院長としての式辞を述べた。そこでは、太宰府を訪ねた時のことを語り、そこに大きく成長した見事な大木に感動を覚えた。しかし、よく見るとその樹木には大きな空洞があることに気付いた。西南学院も大きく成長してきてはいるが、果たして、中身は大丈夫であろうか、空洞になってはいないか、と語り、〈建学の精神〉の重要性を強調し、一同に内省を促した感銘深いメッセージを残した後、福岡空港から心臓の外科手術のためアメリカに旅立って行った。然しながら、1ヵ月後、6月末に手術の甲斐なく召天したという悲しい訃報が届いた。同年7月7日には「故 W. マックスフィールド・ギャロット博士学院葬」（原文ママ）がランキン・チャペルで行われた。同年9月22日に小倉の西南女学院で記念追悼式が行われた。その時、式辞を述べたのは、当時西南女学院理事長杉本勝次（戦前、戦中、西南学院専門学校校長、後に、衆議院議員、また福岡県知事を務める）であり、ギャロットに関する戦時体制下の一つのエピソードを披露した。先述の配給物資受け取りのために並ぶ長蛇の列で、ギャロットは、後から次々にやって来る人々に、お先にどうぞと順番を譲り、いざ自分の番になった時には、もはや物はなくなってしまっていて、彼は地に落ちていた僅かの葉っぱなどを拾って帰って行ったと言うのであった。杉本勝次は日頃から気丈な人であったが、これを語った時ばかりはホロリと涙したのであった。今一つ、ギャロットが交換船で帰米後の彼の地でのことである。アメリカ・ノース・キャロライナ州のリッジクレストにあるバプテストの修養会場において、南部バプテスト派の一つの大きな全国的集会があり、そのスピーカー・講師となったギャロットは演壇上で、椅子から立って講演台に進み出て話を始めようとするが、言葉が出ない。愛する日本、そしてその日本が自分の母国アメリカに戦争を仕掛け、彼自身懊悩のさなかにあった。聴衆には日本の〈真珠湾奇襲攻撃〉に始まった戦争で、反日の感情、雰囲気は充満していたのである。2、3度同じ動作を繰り返した後、遂に彼は毅然として『マタイ福音書』の言葉を引用し始めた。「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなた方の天の父の子となる

ためである。……」(マタイ5:43-45)。そして聴衆に向かって問うた。「わたしたちの敵は誰ですか?日本!」。続いて「わたしたちの隣人は誰ですか?日本!それではキリストの教えのように、私たちは日本を、そして日本人を愛さなければならない!」。実に勇敢な大胆な宣言であった。聴衆の中には、当時まだ神学生であったエドウィン・ルーサー・コーブランド (Edwin Luther Copeland) がいた。コーブランドは自著の中の自分史のところで、「私はこの時、ギャロットの深く〈敵をも愛する〉信仰と、それを勇敢に語り、実践しようとする彼のメッセージに深い感動を覚え、日本宣教を目指す勇氣と決心が与えられた」と記している *E. Luther Copeland, The Challenge and Urgency of Global Mission Today, Broadman Press, 1985*

コーブランドはイェール大学で学位を取得後、1949(昭和24)年、西南学院大学が創設された年の夏に来日し、ただちに大学でキリスト教学とキリスト教歴史部門の担当を始めた。1952(昭和27)年、学長ギャロットが定期帰国のため、学長を辞任した後を受けて第2代の西南学院大学学長に就任し、その後西南学院長にも選任された。実に深い学識を備え高邁な教育者で人格者であった。

アメリカ南部バプテスト派によって派遣された宣教師によって創立された西南学院は、戦前から戦後にも、ずっとバプテスト教会との緊密な関係を保ち、アメリカのバプテスト・ミッションからの祈りを込めた膨大な資金援助とまた人的援助を受けて成長を続けてきた。不幸にして忌まわしい戦争に阻まれ両者の関係は中断してしまったかのようにあったが、献身的な宣教師たちの忍耐と労苦によって、戦後は緊密な関係を回復し、西南学院は発展を続けることができた。上述のように、献身的な優れた人材、指導者が送られ(建学の精神)の基いが堅実に据えられて、西南学院は今日に至っているのである。

【本稿の基になった研究書の著者、キャルビン・パーカー先生は、本稿準備中の2010年12月22日アメリカ・ノース・キャロライナ州で逝去されたとの報に接しました。謹んで心から哀悼の意を表します。神学部と同僚として共に過ごした時代を振り返り、静かにマイクروسコープを通して研究をなさっていた姿、また静かに優しく学生を指導しておられた先生を偲びます。神のみ許で安らかな憩いの内にあることを信じ、祈ります。感謝をもって。】